



真夏のエジンバラ城

筆者は、大学から長期在外研究という貴重な機会を与えられて、昨年度スコットランドの首都エジンバラにおいて一年間滞在することができた。スコットランドは、一九九九年からは実に約三〇〇年ぶりに独自議会と政府が再開され、およそ五兆一、二〇〇億円の独自予算編成権をもち、観光・福祉・交通とならんで教育においても独自の法案編成権を有する独自分権国家として新たな実験的な政策を押し進めつつある。その意味で、そこは、今までも増してイギリスの中のもう一つの国でもある。ところで、日本人にとってスコットランドはイングリッドの影に隠れてあまりなじみがないように思われる。人口五、〇〇万、大ブリテン島の北三分の一を占め、その点でとても北海道に似ているといえる。古くは、謎の怪獣ネッシーの棲むネス湖、またゴルフ通には全英オープン開催地の一つ、発祥の地セントアンドリュースのオールドコースの存在が、さらに世界の子どもたちには、なんといつてもハリ

ーポッターとその創作の現場となったエジンバラに居住する著者J・Kローリングが注目の的といったところだろうか。

それにしても、なにより肌で感じられたのは、現地の子どもと大人の関係が、文化とライフスタイルを背景として日本と異なる点である。端的に言えば、子どもたちは大人の言うことに素直に従うなどということ考えられないのである。小学校の最終学年の教室で、おしゃべりやふざけを咎められても、必ず「えーなんだっていうの?」と必ず反発・反論する。できれば罰をうけずやり過ごせるようごまかそうとする。限度越えた時、教師が「教室から出ていきなさい」と命令した時も「何てひどい先生なんだ!」と捨て台詞の一つも吐いてから出ていく。しかし、それだけのことで

五〇歳前後の審判に対してである。都市の子どもということもあるが、一二歳の子どもが、自分と大人たちをまったく対等な存在としてみていることに驚かされたのである。

それに対し、大人たちは根気良く言葉で理を尽くして説得しているのである。それは、街角で見ると幼児に対する叱り方でも同様であった。先の審判も一〇分近くも延々とその子に対し言葉で論じ説得し続けたのである。なぜなら、野性味溢れ好き勝手し放題の子どもたちに、正面から立ち向かうには、なにより忍耐とパワーが必要となるからである。その点で、教師と大人たちの対応には、力仕事という性格があるように感じられる。ひるがえって、今でもなお日本型企業社会とそこに深く接続する学校の実際以上の肥大化のもとで、学校と職場中心の多忙な家庭生活に追いまくられ、一元的な価値観に晒され自尊感情を素直に育てられない状況にある子どもたちに対し、大人たちの対応は「力仕事」というより今更以上で繊細で鋭敏な「神経労働」の性格を要求されてきているように見える。さて実際、今日の日本の子どもと大人の関係はどう捉えたいだろうか。

## スコットランドの子どもと大人、そして地域と学校

Tomita Miyasuu

富田 充保

ある。授業が学級が崩壊するなどという事にはならない。なぜなら、その時だけのことであり、裏も表もないからである。こうした子どもたちの教師に対する対応の背景には、日本より学校の比重がずっと低いことがわかる。日本では多くの教材を詰めこんだ重い荷物を持って、少なくとも建前上は「緊張して行く特別な場所」であり、敷居の高い場所であるのに対し、

ここでは何の教材も持たずポテトチップを食べながらキックボードや一輪車でふらっと寄る日常の場所である。そこでは、教師が必要以上に特別な存在として映らないことも理解できる。さらには、学校と職場からいったん切れて、平日のアフター5やウィークエンドにおいて民衆的なコミュニケーションベースの文化・スポーツ活動が同じくらい比重でその存在が大事にされていることに思い当たる。子どもも大人も、学校と職場とは異なる独自の時空を平日でも有しているのである。したがって、多くの庶民は平日五時遅くとも六時までには仕事を終えるし、それ以上働かせる事はできないだろう。なぜならアフター5やウィークエンドやホリデーこそ、プライベートな時空として大切にしておき、そのために働いているのだというライフスタイルは、誰も無視する事ができないまで深く浸透しているからである。そして、地域の文化・スポーツ活動のなかでも子どもたちは、大人たちと置り合っているのが、大人たちと置り合っているのだから。そうした場の一つである地元のフットボールクラブでも、オフサイドと判定されて「審判こっちこいよ。しっかり眼をあけるよ」とくる。

五〇歳前後の審判に対してである。都市の子どもということもあるが、一二歳の子どもが、自分と大人たちをまったく対等な存在としてみていることに驚かされたのである。

それに対し、大人たちは根気良く言葉で理を尽くして説得しているのである。それは、街角で見ると幼児に対する叱り方でも同様であった。先の審判も一〇分近くも延々とその子に対し言葉で論じ説得し続けたのである。なぜなら、野性味溢れ好き勝手し放題の子どもたちに、正面から立ち向かうには、なにより忍耐とパワーが必要となるからである。その点で、教師と大人たちの対応には、力仕事という性格があるように感じられる。ひるがえって、今でもなお日本型企業社会とそこに深く接続する学校の実際以上の肥大化のもとで、学校と職場中心の多忙な家庭生活に追いまくられ、一元的な価値観に晒され自尊感情を素直に育てられない状況にある子どもたちに対し、大人たちの対応は「力仕事」というより今更以上で繊細で鋭敏な「神経労働」の性格を要求されてきているように見える。さて実際、今日の日本の子どもと大人の関係はどう捉えたいだろうか。

二〇〇六年

## 人文学部「子ども発達学科」を開設

## 「教科指導」に強い小学校教員の養成を目指す

本学で構想を進めてきた新学科設置構想について、具体的作業を進め、本年九月二十八日付けにて文部科学省に届出を行った。これにより、二〇〇六年四月には道内では国公立を通じて初めての『子ども発達学科』が誕生することとなった。同時に、小学校教諭一種免許状の課程申請を行った。

新学科は、全国で三番目に開設された人文学部人間科学科の三十年に及ぶ研究・教育の実績を生かし、初等教育をはじめ、子育て

支援、特別支援教育に関する専門カリキュラムを配置し、小学校教員をはじめ、発達・教育の専門家を養成することを目的とした学科である。

我が国では、少子化が進行するなか、家庭・地域・学校で連携した子育てが模索されている。また、今後十年間のうちに、全国の小中学校教員のおよそ半数が定年退職のために入れ替わることが予想されており、質の高い小学校教員養成に期待が寄せられている。

## ■「子ども発達学科」の特色

人文学部で既設の人間科学科、

臨床心理学科で開講されている心理学、児童福祉、臨床心理に関連する科目の履修を可能とし、その上で学科独自の子ども発達学関連科目、及び教職科目を体系的に配置している。カリキュラム全体は「心理・発達」「社会・福祉・教

育」「小学校専門科目」の各科目群により構成される。たとえば、

「発達心理学A・B」「子どもの発達と文化」「自然環境と子ども」「子どもの発達と教育」「子どもの発達と栄養」など、今日、子どもを育てる上で見直されつつある課題に関する科目を各科目群に

配置した。特に、札幌学院大学の重点的事業として取組を進めてきた「子どもを対象とした大学地域

## ■学科の募集定員と教員

子ども発達学科は教育の質を一層高めるために入学定員五十名とした。専任教員スタッフは、発達心理学、教育心理学をはじめ、学校教育実践、特別支援教育、算数科教育、理科教育、社会科教育、音楽科教育、体育科教育などを専門とする十名で構成される。さらに、小学校教諭免許状取得に欠かすことのできない教科指導に関する科目においても道内はもとより、全国の第一線で活躍する教育実践者・研究者がスタッフとして加わる。

本学科では、少人数で学生全体にゆきとどく講義・実習は言うまでも無く、一年次の「子ども発達基礎ゼミナール」をはじめ、「教

連携活動（遊ベンチャー）」として北海道新聞において紹介された」への参加を通じた実践型の教育にも力を入れ、「ものづくりと子ども発達」「地域の子どもマネジメント実習」は学科の特色ある科目として位置づけられている。

職総合演習」、「専門ゼミナール」、「卒業研究」まで、四年間を通じて十名前後の単位で子ども発達学、小学校の教科教育、教育実践に関する掘り下げた教育が行われる。また、三年次の「教職特別演習」においては、都道府県が実施する教員採用試験に向けた体系的な指導が行われることも大きな特色となっている。

学内では、ピアノ教室をはじめ、理科実験室、家庭科実習室などの施設工事が始まり、同時に学協会会議を開催し、新一年生を迎えるに当たって、教育内容・システムを具体化する準備作業が進められている。

## ■新しい「子ども学」と教育研究を目指して

子どもとはいかなる存在なのか、近年の研究を通して乳幼児期を含め、子どもは彼らが置かれた状況次第では、我々が予想する以上に有能であることが指摘されてきた。大人が行う文化的な実践活動へ周辺の参加することを通じて、新たな知識を自ら生成することができると。一方で、彼らは多くの誤った学習をすることも事実である。たとえば「塩水では物は浮きやすいが、砂糖水では沈む」な

どという信念は理科の「浮力の原理」を学んだ後でさえ修正されにくい。発達と教育を考える場合、子どもにこうした認識の構造・内容を把握する必要がある。教育は学習者の特質を十分に押さえてこそ、有効な方略が見出されるといえる。こども発達学科では特色ある子ども研究に力を注ぎつつ、彼らの「発達の变化」を導く研究と教育を正面に掲げ、スタートしたいと考えている。(小林 好和)

## 臨床心理学研究科

### 特別選抜試験実施される

去る八月二十九日に臨床心理学研究科特別選抜試験が実施され、九月五日には五名の受験生全員の合格が発表された。この特別選抜試験は本研究科が初めて実施したものである。これまでの入学試験は学部卒業生も学外からの区別なく同一の選抜を実施してきたが、昨年度学部臨床心理学

科第一期生の卒業を見たことから、早急に制度的にも学部と研究科の一貫教育を保証する意味でも学部卒業生に対する特別選抜制度の導入が求められていた。この間受験資格、選抜方法等短期間に検討を加え十月一日〜二日の両日実施される従来の一般選抜と合わせて平成十八年度の入試とし

て実施し得たことは幸いなことであった。ただ入試説明会から本特別入試による出願期間まであまり時間的余裕がなく受験生がいささか少なかつ

## 日本臨床心理士資格認定協会 大学院指定継続申請でAの評価を得る

本研究科は日本臨床心理士資格認定協会より一種の指定を受けているが、この指定は平成十四年から平成十七年までの時限的な認定で認定の終

了期限前に継続申請の手続きをすることとなっている。今回規定に従い八月末に継続申請の書類を提出していたところであるが、九月十五日付で総合評価Aの評定と共に平成十八年四月より向こう六年間の第一種の指定継続証が届いた。聞くところによれば今回指定継続の申請をした研究科は全国一七校であるが、総合評価Aの評価を得たのは本研究科のみであったとのことである。日ごろの努力が高い評価を得たものと研究科教員、教職員一同に感謝申し上げたい。今後とも研究科の充実のためさらなる研鑽に努めたいと考えている。(池田 光幸)

## 二〇〇五年度前期末

### 学位記授与式

#### ―新たに五名が卒業―

本年度前期末学位記授与式(卒業式)が九月二十九日、本学G館(創立五〇周年記念館)で挙行された。全学で四九名の新たな学士と修士二名が誕生した。

授与された。また、式後の卒業祝賀会はG館のレストラン文庫にて開催された。それまでの苦労話や思い出話など、卒業生を囲みながら、学長をはじめ教員・職員との和がいくつもできた。これで人文学部の学士号取得者は五、一二名(人間科学科三、四四七名、英語英米文学科一、五六〇名、臨床心理学科一一四名)となった。

二〇〇五年度

# 人文学部夏期集中講義

## 人間科学科

### 人間論特殊講義

#### 「心理学」ブームを解体する

人文学部における「二十世紀の人間科学」(第四回目は、このところマスコミや出版物等でも続いてきた「心理学」ブームに焦点を当て、「心理学」が社会に与えてきた負の貢献を多面的にあぶり出し、真の心理学の再生を考えるという目的で実施された。



今日の不安定な社会的状況における「心のケアとその効果」への過剰な期待、その背景にある心を実体概念として捉えがちな傾向、社会の心理主義化、若者の間で氾濫し、人間の安易な「判定」に用いられる心理テスト、いわゆる「三歳児神話」を源流とする子育てにおける母親責任論などが根強くみられる。

そこで今回、人文学部において教育、発達、社会、言語コミュニケーションを専門とする教員に社会情報学部で社会学専門の教員が加わり、これらの状況・問題点について、学生を対象とした調査の結果等を含めながらそれぞれの立場から提言を行った。最終日は、五名の講師全員が参加し、受講者(社会人を含め約二〇〇名)との相互の意見交換を含むシンポジウムで締めくくった。全体日程は次の通りである。

#### ●八月一日(月)

知ったかぶりの「心理学」

工藤与志文(教育心理学)

#### ●八月二日(火)

産まれたての心は「白紙」か

小林 好和(発達心理学)

#### ●八月三日(水)

「他人の心」を知りたがる「心」

舛田 弘子(ことばとコミュニケーションの心理学)

#### ●八月四日(木)

からだを単位とする「心の働き

鈴木健太郎(環境と行為の心理学)

#### ●八月四日(金)

社会の心理主義化を問い直す

井上 芳保(社会学)

#### ●八月五日(土)

シンポジウム

「心理学の再生」をめざして

シンポジウムでは、医療従事者によるカウンセリングの実態を踏まえながらの指摘、さらに臨床心理学科学生の「人間を評価する」ということの問題点、英語英米文学科学生から学校教育と心理学等に関する問題等、活発な意見が出された。また社会人から「人工知能」、さらに

脳の働きの研究成果を含む議論も必要ではないかとの指摘もなされ、心理学の対象と方法を改めて考え直す機会になったと思われる。(小林 好和)

### 文化史特殊講義B

本科目は「アイヌ口承文芸から歴史をどう読みとるか」というテーマを掲げ、東京から児島恭子先生をお招きして開講した。

児島先生は日本古代史をご専門としながら、専門家も顔負けのアイヌ語の語学力を有しかつ文化人類学や口承文芸学の理論にも通じた研究者である。右記のテーマを正面から扱うとなると、余人をもつて代えがたい。

講義内容は多岐にわたったが、いずれの論点も示唆に富むものであった。そのなかから私のフィールドでの経験と接点を持つ一例をあげ、講義の紹介に代える。

アイヌ口承文芸のなかには、悪者に襲われるなどといった滅んだ村の生き残りが、しばしば他の集落の村人の力を借りて、村を復興するという一群の物語が存在する。児島先生は本講義で、こうした物語が血統、婚姻関係、通婚圏などを伝える

社会的機能を持つと提案した。

さてアイヌ口承文芸の語り手として知られた織田ステノ氏が、ある集まりで物語を語り、私が日本語での解説を仰せつかったことがある。時間を気にした私が「悪者を退治して村に帰り、めでたしめでたし」とまとめたところ、織田さんは私を叱りつけた。そのあと誰が誰と結婚してどの村に住みどのように祭祀を復興したかという結末部分を省略するなどというのである。

児島先生のご提案は、語り手のこの意識を見事に説明する。織田さんは単に細部にこだわったのではないのだった。(奥田 統巳)

### 英語英米文学科

#### イギリス文化論

この集中講義は、昨年、松山大学人文学部と札幌学院大学人文学部の国内交換留学協定の締結により実現したものである。学生より一足先に、教員の交換講義が実現した。

授業内容はイギリス文化に関する基本的かつ重要な事柄について、その特徴や歴史的背景などについて講義形式で解説を行うものであった。授業内容の具

体的項目としては、イギリスに

関して、その歴史と風土、英国

国教会、階級社会、階級文化、

教育制度、庭園とガーデン、

経済、国民性を、またアイルラ

ンドに関して、その歴史と風

土、北アイルランド問題を取り

上げた。授業方法は、基本的に

毎回一テーマを取り上げ、授業

内容を要領よくまとめたレジュ

## 臨床心理学科

### リハビリテーション臨床

#### 心理臨床特殊講義A

本年度、臨床心理学科の集中講義として、「リハビリテーション臨床」と「心理臨床特殊講義A（教育心理臨床関連）」の二科目が開講された。

「リハビリテーション臨床」は、苫小牧東病院院長の橋本洋一先生にご担当いただいた。リハビリテーションの定義・歴史に始まり、運動学の基礎知識、理学療法や作業療法といった具体的な介入支援、さらにはおそらくこの講義でしか紹介されないであろう、義肢に代表される装具学にまで及ぶ、リハビリテーションに関する広範な知見が披露された。橋本先生は現役の病院長としてご活躍のこともあり、豊富な臨床経験に基づいた、医療現場における心理的援助について学ぶ得難い機会を、受講した一〇〇余名の学科学生は賜ったことと思う。橋本先生はすでに三年に渡って、本講義をご担当下さっている。障害者心理臨床という領域は、本学科カリキュラムの一つの特徴であるが、橋本先生のご助力に負うところは大きいと思われる。記

して感謝する次第である。

「心理臨床特殊講義A（教育心理臨床関連）」のご担当は、

市川啓子先生であった。小中学生の情緒的あるいは行動上の不適応が、最も先鋭に表面化する場は学校である。学校における不適応の実際として、いじめや不登校が講義では取り上げられた。そしてそれらがどのような要因によって発生するのかが、

養育環境や家族関係の変化、テレビ等の文化的要因などが吟味されつつ、読み解かれた。市川先生は長年、教育現場でスクールカウンセラーを務められている。問題が生じる現場に身を置かれる先生の経験と実践が反映された講義であった。およそ一〇〇名の受講学生にとっては、橋本先生と同様、現場における心理的援助を学ぶ貴重な機会だったと思う。必修科目としても配置されているように、本学科カリキュラムにおいて、教育心理臨床関連科目は重要な位置を占めている。市川先生は、この一翼を担って頂いているとともに、本学科専門科目「家族心理学」でもご協力頂いている。市川先生の少なからぬご助力にも、この場を借りて感謝申し上げます。

## 人文学部新入生体育大会

平成十七年六月十八日に新入生体育大会が行われました。この体育大会は、クラスの親睦を深めると共に、学年全体の交流を図ることが目的で毎年行われています。

今年は大バレー、ドッジボール、綱引きの三種目で行うことにしました。今回の開催日が土曜日ということもあり、参加者が少ないのではと心配しましたが、多くの学生が集ってくれ、大いに盛り上がったので、たいへん嬉しく思いました。

もともと、体育大会実行委員が皆一年生だったのでわからないことが多く不安でしたが、自治会の方々により



助けていただきながらの作業だったので、スムーズに予定などを進めることができました。

当日になると、各クラスが真剣になり、白熱したゲームを繰り広げていました。実は、大学生は冷めていて、熱くなることはないのかと予想していましたが、意外にも燃えているみんなの姿を見て、驚きもあり、また嬉しくも思いました。大会終了後の交歓会にも、多くの学生が参加してくれていたため、ホッとしました。

今回自ら進んで委員長をやりましたが、(昼休みがなくなるのが嫌だったので仕方なくでしたが(笑))委員長としての責任や、会議を進行させる難しさなど、その立場に立ってみないとわからない経験を多く学んだと思っています。今回の行事を終えてみて多くの出会いがあり、良い大学生活をスタートできたと思います。今後もこのような行事に積極的に参加していきたいと思えます。最後になりますが、この行事をきっかけに人文学部がより活気付くものになればよいと願っています。

(人間科学科一年

佐藤 剛志)

英語で寝言!  
充実した  
英語キャンプ

今回で四回目を迎えた英語キャンプが、八月七日から三泊四日間の日程で、山と海に囲まれた古平町家族旅行村で開催された。三つの学科からの参加学生一名、教員四名、特別参加者二名が四つのキャンピンに分宿し、様々な活動を通じて英語を使ったコミュニケーションに努めた。

この夏一番の好天に恵まれた四日間を通して、生活言語としての英語を楽しみながら、学生の英会話に対する自信とレベルの向上を目指すという英語キャンプの目的を十分達成することが出来た。

第一日目は自己紹介に始まり、T・P・P・グロース先生とD・W・ケイ先生は英米の言語ゲームを紹介し、ルールを学ぶ過程で学生達は新たな英語語彙とその使い方を学び、大いに英語脳を活性化し



学生がそれぞれ写真や趣味の品を持ちより、自分の旅行体験や得意分野について紹介した。夕食は地元産の積丹でとれた海産物のバーベキューパーティーで、ホタテ、ツブ、イカ、ホッケを存分に味わった。食後、それぞれのキャンピ

ていった。二日目には美国町の砂浜で、夏の太陽の降り注ぐ中で水泳や、スイカ割り大会、ビーチボール大会を楽しんだ。夕食はみんなでカレーライスを作り、甘味、中辛味、辛味の三種のカレーと甘いメロンを満喫した。三日目は

学生がそれぞれ写真や趣味の品を持ちより、自分の旅行体験や得意分野について紹介した。夕食は地元産の積丹でとれた海産物のバーベキューパーティーで、ホタテ、ツブ、イカ、ホッケを存分に味わった。食後、それぞれのキャンピ

最終日の午前中、英語キャンプでの体験の感想を学生達一人一人発表し、英語会話に対する自信、積極的な学習意欲の表明に大いに盛り上がった。特に、学生達が自然なかたちで英語を駆使し、日本語が全く聞こえてこなかった点が印象的であった。

グロース先生とケイ先生の精力的な指導に加えて、学生達と同世代であるグロース先生の娘ハナさんと息子イアン君が参加してくれたこともあって、学生達は無理なく日本語の誘惑を克服できたのである。直後のアンケートの中で多くの学生が四人に対する感謝の言葉を綴っていた。

この素晴らしいプログラムの発案者である中川文夫先生が二日目から参加して下さり、笑顔で見守って下さったことにも感謝申し上げたい。

(宮町 誠)

優秀賞受賞

Oxford Graded Readers Competition



英語英米文学科三年生の小田桐瑠美さんが、Oxford University Pressが主催する「Oxford Graded Readers Competition」で優秀賞を受賞しました。これは、グロース先生が彼女の二年生時の英文講読の授業で使ったテキスト「Far From The Madding Crowd」(英文学史上著名な作家トマス・ハーディの長

編小説『遙か群集を離れて』)を読んで、英語での感想文コンクールに参加し、見事、優秀賞を受賞したものです。小田桐さんは二年生の後半に、本学が主催する半年の海外留学プログラムに参加し、カリフォルニア大学デーヴィス校より、今年の春に帰国しました。その体験を含めて、小田桐さんの日ごろの英語に対する研鑽が実を結んだのです。ちなみに、賞品は英英辞典Oxford Advanced Learner's Dictionaryでした。この快挙が同じく英語を学ぶ英語英米文学科の学生にたいし、よい刺激になることが期待されます。

(菅原 秀二)

海外留学

英語英米文学科半期海外留学の第六期生二〇名がカリフォルニア大学(アメリカ)とモナツシュ大学(オーストラリア)にて学んでいる。留学生生活を通して異文化コミュニケーション、異文化理解を深めることが期待される。

2005年度英語英米文学科  
半期海外留学参加状況

2005年9月30日現在

留学先大学	参加人数	性別	
		男	女
アメリカ・カリフォルニア大学デーヴィス校	4	2	2
オーストラリア・モナツシュ大学	16	6	10

## 2005(平成17)年度人文学部校務分掌

2005年4月1日

役職・委員会等の名称	学部枠	人間科学科	英語英米文学科	臨床心理学科
学部長		廣川		
大学院研究科長				○池田
学科長		湯本	中村	○滝沢
心理臨床センター長				○池田
人文学部教務委員会 (含 視聴覚・LL担当委員)	5	◎久米(舛田)、 富田、木戸	岡崎	○森
人文学部広報委員会 人文学部報編集委員 学院評論編集委員(全学) 人文学部WWW管理者		白杵 (WWW、○奥田)	菅原	徳田
人文学会幹事会		○新田	○坪井	伊藤
全学教務委員会	1			森
学生委員会	1			○佐野
進路支援委員会 (就職委員会(全学))	3	◎鈴木、笹岡	山添	安岡
学部入試委員会 (広報入試委員会(全学))	3	松本	◎宮町、菅原	◎橋本
図書委員会	1			○井手
研究委員会	1	○新田		
電算機センター運営委員会	1			○葛西
国際交流委員会	1		○グローズ	
教職課程委員会	1	富田		〈伊藤〉
” (教育実習主担当)		工藤、富田、(高橋) (片桐)、(小原)	(櫻田)	
国庫助成教授会連合		船津		
学生相談室相談員 (総合教育センター)		奥田、松川		
部門協議員		○大瀬、船津	川瀬	
各課協議員				
学長		○布施		
全学部長職		○小林(教務) ◎鶴丸(入試)		
全学委員長職		○工藤	○グローズ(国際)	
大学協議員(学部・選挙)	2	湯本	中村	
大学協議員(センター選出)		内田	岡崎	
理事(選挙)		川合、酒井、杉山		
教員評議員(選挙)	1			滝沢
アドミッションアドバイザー		○酒井	○坪井	○森
留研		奥田(後期) 松川(後期)	ヒンクルマン(前期) 津田(平体)(後期・06前期)	
無任所		奥谷(社会連携センター) 内田(組合執行委員)		

備考 1. ○印は継続 2. ◎印は3年目 3. 国際交流センター所員 ○グローズ

## 訃報

人文学部教授高橋渉先生が、去る四月五日入院治療中に急逝されました。

先生は札幌盲学校を初めとして障害児教育に尽力され、全国の大学で非常勤講師として活躍されるときともに、学外で障害児・者の生活と労働の向上のために、サポート団体の中心としても貴重な役割を果たしてこられました。平成十二年四月本学に赴任されてからそうした経験を教職課程科目と人間科学科の障害児教育関連科目を担当される中で学生に伝えていただきました。

先生のいままでのご尽力に心から謝意を表すとともに、ご冥福をお祈り致します。

(富田 充保)

2005年度学部教員の人事、研究活動等

(4/2~9/30)

◎海外研究出張

- 白杵 勲 ○五年五月十九日~五月二十二日 ウラジオストク「国際シンポジウム関係打ち合わせ」
- 白杵 勲 ○五年五月二十九日~六月五日 ロシア「Vladivostok International Symposium2005 国際シンポジウム参加」

- 白杵 勲 ○五年六月二十五日~七月九日 モンゴル「The Construction of Economy in Mongolia: using the natural and cultural Resources 国際会議出席」

- 坪井 主税 ○五年四月二十九日~五月九日 スペイン「第五回国際平和博物館会議」
- 鶴丸 俊明 ○五年八月八日~八月二十六日 モンゴル「共同発掘研究」
- 新田 雅子 ○五年五月十八日~五月二十二日 ロンドン「The 5th International symposium on Cultural Gerontology」

◎口頭研究報告

- 橋本 忠行 ○五年七月二十三日~八月一日 スペイン「第十八回国際ロールシヤッハ学会」
- 平体 由美 ○五年八月二十二日~八月三十一日 アメリカ「二〇〇六年三月アメリカ南部史学会のパネラーとの面会」他
- 松本伊智朗 ○五年六月十一日~六月十七日 ロンドン「日本人ども虐待防止学会の打ち合わせ」

◎出版物

- 白杵 勲 (分担執筆)『中世総合資料学の可能性―新しい学問体系の構築に向けて』前川要編 新人物往来社 二〇〇四年十一月十二日 二二二頁 三五〇〇円+税
- 白杵 勲 (分担執筆)『海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会編 六一書房 二〇〇五年二月十五日 四二二頁 八〇〇〇円+税
- 菅原 秀二 (共訳)『いま歴史とは何か』デイヴィッド・キヤナダイン編著 ミネルヴァ書房 二〇〇五年五月 二六七頁 三五〇〇円+税

◎委嘱発令

- 伊藤 則博 北海道社会福祉審議会委員長(北海道) ○三年十月~〇五年九月
- 伊藤 則博 北海道ノーマライゼーション研究センター運営委員(北海道社会福祉協議会) ○四年四月~〇六年三月
- 伊藤 則博 北海道児童青年精神保健学会理事(北海道児童青年精神保健学会) ○三年二月~〇六年一月
- 伊藤 則博 北海道子ども学会監事(北海道子ども学会) ○三年八月~〇六年七月
- 伊藤 則博 北海道乳幼児療育研究会常任理事・名誉会長(北海道乳幼児療育研究会) ○三年十月~〇六年九月
- 伊藤 則博 北海道LDサポート学会監事(北海道LDサポート学会) ○四年四月~〇七年三月
- 伊藤 則博 日本子ども社会学会評議員(日本子ども社会学会) ○三年六月~〇六年五月
- 伊藤 則博 日本乳幼児医学・心理学会評議員(日本乳幼児医学・心理学会) ○三年十月~〇六年九月

- 伊藤 則博 日本発達障害学会編集委員(日本発達障害学会) ○四年八月~〇七年七月
- 伊藤 則博 日本発達障害療育研究会評議員(日本発達障害療育研究会) ○三年十月~〇六年九月
- 伊藤 則博 日本家族心理学会編集協力委員(日本家族心理学会) ○三年十月~〇六年九月
- 滝沢 広忠 高齢聴覚障害者を対象にした情報保障とコミュニケーション支援のための調査研究副委員長(社団法人北海道ろうあ連盟) ○五年二月~〇六年三月
- 滝沢 広忠 日本集団精神療法学会理事(日本集団精神療法学会) ○五年度~〇七年度

◎研究助成

- 白杵 勲 「北東アジア中世遺跡の考古学的研究」代表(文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究) 八九〇万円
- 白杵 勲 「中世考古学の総合的研究」研究分担者(文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究) 一七〇万円
- 白杵 勲 「北海道における古代から近世の遺跡の暦年

- 代」代表(日本学術振興会科学研究費 基盤研究B) 三〇〇万円
- 奥田 統己「アイヌ語諸方言の調査・資料の保存・整理・公開版作成と資料アーカイブの構築」(科学研究費補助金 基盤研究C) 一〇〇万円
- 滝沢 広忠「社会・文化的視点に立った聴覚障害児・者の臨床心理的支援システムの構築」(科学研究費補助金 基盤研究C) 一八〇万円
- 鶴丸 俊明「北海道東・北部の細石刃石器群に関する比較研究」(科学研究費補助金 基盤研究C) 一九〇万円
- 新田 雅子「後期高齢期の夫婦のみ世帯における生活課題特性」個人研究(財団法人北海道高齢者問題研究協会) 二九・九万円

編集後記

次年度から新学科が設置されることとなり、今号ではその内容をご紹介します。社会のニーズに応えるべく学部も日々変化していきます。

(U・S・T・M)